

「生活科教育法」における動物飼育講義・体験活動導入の意義

The Lecture and Activities on Animal Breeding in the Teaching Method of Living Environment Studies

宮 蘭 衛・宮 川 保*

第1章 教員養成課程での動物飼育講義と 体験活動導入の先駆的取組み

平成20年の学習指導要領改訂は、平成元年に生活科が導入されて2回目の改訂になる。今回の改訂により、小学校低学年生活科での継続的な動物飼育が明示された。『小学校学習指導要領 第2章 第5節 生活』の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」には、以下のような記述がある。「(2)第2の内容の(7)については、2学年にわたって取り扱うものとし、動物や植物へのかかわり方が深まるよう継続的な飼育、栽培を行うようにすること。」動物飼育を2年間にわたり長期間・継続的に実施することが求められている。

学校での動物飼育は、動物の生態に関する認識を育むと共に、生命尊重の心を育む、生き物を愛護する態度を育む、やさしさ、思いやりを育むなどの教育的効果が期待でき、命の教育や環境教育などの観点から今後さらに重要視されると考えられる。しかし、そのために教員に必要とされる動物飼育の知識を高め経験を豊かにする制度は整っているのだろうか。教員養成学部・大学において、生活科での動物飼育の在り方を正しく理解し、動物への愛着を持って関わる経験の場を整えることが急務である。

学校で動物を飼育し、効果的に教育に利用するためには動物の特性や動物飼育に関する知識と動物との関わりの経験が必要であり、『学習指導要領解説生活編』（平成20年8月）に指摘されるように、専門家の指導・助言が不可欠と考えられている。この

点に関して、同『解説 生活編』には、以下のように獣医師等との連携の必要性が説かれている。「動物の飼育に当たっては、管理や繁殖、施設や環境などについて配慮する必要がある。その際、専門的な知識をもった地域の専門家や獣医師などの多くの支援者と連携して、よりよい体験を与える環境を整備する必要がある。」しかし、大学の教員養成課程において、具体的な動物飼育に関する講義と体験活動は従来ほとんど行われず、新潟大学や群馬大学など数少ない大学で先行的に行われるのみであった。近年は、徐々に実施する大学・学部が増えつつある。

上記『解説 生活編』では、「モルモットって、抱っこするととってもあったかいね」（34頁）という子どもの発言・気づきの文章形をとりつつ、飼育動物例としてモルモットが挙げられている。では、学校ではどのような動物を子どもにどのように飼育させることが望ましいのであろうか。或いは、動物飼育指導に当たって教師にはどのような知識・経験が必要なのであろうか。筆者等は、動物飼育に関する正しい知識と動物と触れあう豊かな経験をもって教職に就く学生を育てることが大切であると考え、8年前より新潟大学教育学部（当時の学部名称は教育人間科学部）において、「生活科教育法」（担当：宮蘭衛・半期2単位）に動物飼育講義と動物ふれあい体験活動を取り入れてきた。その「生活科教育法」に宮川が学部非常勤講師として参加し、獣医師の立場から飼育動物の特性と動物への関わり方に関する講義並びに小動物とのふれあい実習を担当・実施している。

平成16.17.18.21年度の4回にわたり受講者計336名の学生に対して、講義前と講義後の2回にわたりアンケートを実施し、これから教師を目指している

学生の学校飼育動物に関する意識・関心度と動物飼育講義・体験実習の意義について調査し、今後の「生活科教育法」の在り方について考察した。

第2章 動物飼育の講義と実習（ふれあい体験活動）の概要

「生活科教育法」は小学校免許取得希望者には、必修の教職科目である。新潟大学教育学部では、毎年、前期・後期に2単位の「生活科教育法」を開講している。動物飼育の講義と体験活動には、犬・ウサギ・チャボ等の小動物が一緒である。このため、通常の授業時間帯での設定が難しいので、土曜日の午後に集中補講の形で実施している。

講義・体験活動の内容は、大まかには以下の通りである。

I 人間と動物の関係学

- ①人間と動物の絆
- ②動物が人に与える効果
- ③動物飼育が子どもたちの発達に与える影響
- ④動物飼育の教育的意義
- ⑤動物飼育に関わる問題点
- ⑥少年犯罪と動物虐待
- ⑦心の教育と動物飼育
- ⑧学習指導要領と動物飼育
- ⑨動物飼育活動と動物愛護法
- ⑩動物介在教育実施ガイドライン

II 学校飼育動物飼育・衛生管理学

- ①小学校における動物飼育の注意点
- ②動物の飼い方
- ③動物の疾病と対策
- ④人と動物の共通感染症

III 動物ふれあい実習

- ①動物との接し方・ふれあい方
- ②動物の抱き方
- ③心臓の音を聞く

講義内容は、大きく2つに分けられる。1つは「人間と動物の関係学」であり、もう1つは「学校飼育動物飼育・衛生管理学」に関わる内容である。スライドを使用し、小学校での事例を取り入れ、写真を使って分かりやすく説明する。

【写真1 宮川獣医師による講義】



新潟大学教育人間科学部生活科教育法

実習（ふれあい体験活動）は学校で多く飼育されているウサギ・モルモット・ハムスター・チャボと、日頃からふれあい活動などに参加しよくしつけされた犬を使い、学生が実際にそれらの小動物に触れ、抱く活動を取り入れている。動物の心音に関しては、獣医師の指導の下に、動物の心音と自分の心音を聞き比べるなどして、動物に親しみを持てるような指導を行っている。

【写真2 動物ふれあい体験活動①】



【写真3 動物ふれあい体験活動②】



【写真4 動物ふれあい体験活動③】



【写真5 動物ふれあい体験活動④】



第3章 学校の動物飼育に関するアンケート調査とその分析

第1節 アンケート調査実施年度と対象者数

- (1) 実施年度 平成16.17.18.21年度
- (2) 対象者数 教育学部（教育人間科学部）生
計336名（2年次以上の学生）

第2節 アンケート項目

(1) 講義前

- ①ペット動物が好きですか
- ②ペット動物に触れますか
- ③ペット動物が怖いですか
- ④動物を飼った経験がありますか
- ⑤小学校時代に学校の動物に親しんでいましたか
- ⑥小学校時代の飼育舎の感想は
- ⑦子どもの成長には動物飼育の経験が大事だと思いますか
- ⑧小学校では動物飼育が必要だと思いますか
その理由

(2) 講義後

- ①実習動物に触りましたか
- ②実習動物をどう思いましたか
- ③動物を怖いと思いますか
- ④子どもの成長に飼育経験が大事だと思いますか
- ⑤小学校では動物飼育が必要だと思いますか
その理由
- ⑥講義、実習の感想

第3節 アンケート項目から

各アンケート項目のデータは、本論の末尾に掲載してある。

これらの中から、幾つかの項目について概観してみる。

(1) 動物飼育経験について

まず、これまでの動物飼育の経験について聞いてみた。

（項目1）「犬・猫・ウサギなどの哺乳類や愛玩用の小鳥などのペット動物が好きですか」の質問に対し、「大好き・好き・どちらかと言えば好き」が303名、90%、「どちらかと言えば嫌い・嫌い」が33名、10%であった。また、（項目2）「あなたは動物を飼った経験がありますか」という飼育経験を問う質問に対して、魚や昆虫類も含めて、全く動物飼育経験のない学生が336名中53名、15.7%あった。

（項目4）「小学校時代の飼育舎の印象は（複数回答）」どうであったかをきいた質問では、飼育動物の印象はあまり良くなく、「可愛かったが、汚い、くさい、かわいそう」という意見が多く、適切な飼育体験が行われていないようであった。

（項目1）の質問に対して「どちらかと言えば嫌い・嫌い」と回答した33名について、分析してみた。すると、33名中16名が「動物飼育経験なし」であった。また、14名が学校の飼育動物の「印象がない(6名)」「近づきたくなかった(8名)」と否定的な経験を挙げている。更に「飼育舎の印象(複数回答)」については、「きたなかった・くさかった(20名)」を筆頭に、否定的な印象を持っていることが分かる。動物とのより良いふれあい体験を組織することが大切であると考えられる。

(2) 「生活科教育法」での動物ふれあい体験活動の効果について

次に「生活科教育法」での動物ふれあい体験活動の前後に関する質問である。

（項目5）「あなたは実習で動物に触りましたか

か」という質問に対して、講義前はウサギ・モルモット・ハムスター・チャボに全く触れなかった学生が20名6%いたが、講義後には8名2%に減少した。

(項目6)「あなたはこれらの動物をどう思いましたか。実習前とかわりましたか」という質問に対しては、講義前は「どちらかと言えば嫌い・嫌い」が38名11%であったが、講義・実習後ではそれらは13名4%に減少している。

講義・ふれあい体験活動を通して、小動物に触れられなかったり、嫌いと感じたりしていた学生が減少していることが窺える。

- (3) 子どもの成長や学校教育での動物飼育の役割について

(項目7)「子どもの成長には動物飼育の経験が大事だと思いますか」という質問に対して、講義前は「どちらかというところ大事でない、まったく関係ない」と回答した学生が13名4%であったが、講義後には4名1%となっている。

(項目8)「小学校では飼育動物が必要だと思いますか」という質問に対しては、講義前では「必要」が164名48%、「不必要」が10名3%であったが、講義後は「必要」が227名67%に増加し、「不必要」は3名1%に減少した。

「生活科教育法」での講義・ふれあい体験活動を通して、受講者は子どもの成長や教育活動にとって、動物飼育が大事であり、必要であると考えようになっている。

第4章 まとめ ― 講義・体験活動に関するアンケート結果からの考察

以上のアンケートから、以下のような4点が指摘できる。

- ① 新潟大学教育学部の学生は、全体的には動物飼育経験があり、動物好きであるようだが、幼少期に適切なふれあい体験を経験していない傾向がある
- ② 将来教師になったときの動物飼育に対する不安を持っている
- ③ 適切な動物飼育に関する講義と実習で苦手意識や思いこみ、不安を解消することもできる
- ④ 飼育に関する知識と動物とのふれあい体験が豊富で、清潔で穏和な動物を調達可能な獣医師などの学外講師の活用が必要である

教員養成課程において、教育に動物を効果的に利用する方法、適切に飼育する方法についての基礎的な教育を行うにあたり留意すべきポイントは、以下の諸点である。

- 1) 動物の生物学的知識や飼育の方法など技術的な知識のみを教えるだけではなく、生命を尊重すること。
- 2) 動物を愛護することなどを理解させ、動物を飼育する意義を教えることが大切で、動物が人に与える効果、特に命を粗末に扱わないような飼育方法を指導し、生命尊重の教育との関係についても理解を深めるように指導すること。

大学生の大半は動物好きであるが、その動物飼育の経験は比較的浅く、特に学校で飼育されている小動物に触った経験がない者が多く、先入観から苦手や嫌いだと思いこんでいる傾向が見られた。講義、体験活動を通して適切なふれあいを行うことにより、苦手意識などの思いこみを考え直すことができるため、机上の知識だけに留まらず、実体験を伴う飼育動物がかわいと思うようなふれあいの実習が有効であり、不可欠だと考えられる。

このためには、飼育に関する知識と動物とのふれあい体験が豊富で、清潔で穏和な動物を調達可能な獣医師などの学外講師を積極的に活用することが有効であり、今後そのような取り組みを教員養成課程において充実することが望まれる。

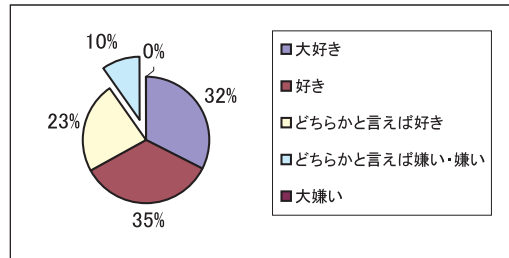
注) 本論は、平成22年5月に開催された日本環境教育学会沖縄大会の自由研究発表(発表者:宮蘭衛・宮川保)を基にまとめたものである。

また【写真1】は、教育人間科学部時代のもの、【写真2～5】は教育学部に再改組後のものである。

平成16年・17年・18年・21年度 新潟大学における学校飼育動物に対する意識調査

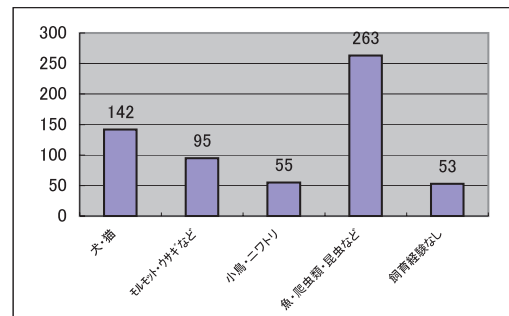
(項目1) あなたは犬・猫・ウサギなど哺乳類や愛玩用の小鳥などのペット動物が好きですか。

大好き	109	32%
好き	116	35%
どちらかと言えば好き	78	23%
どちらかと言えば嫌い・嫌い	33	10%
大嫌い	0	0%
計	336	100%



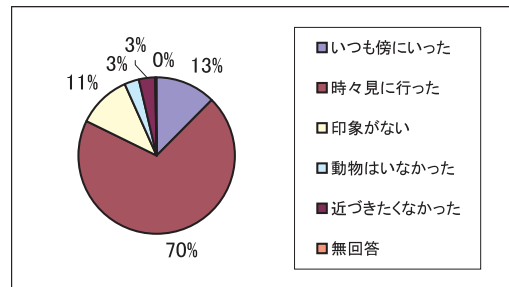
(項目2) あなたは以下の動物を飼った経験がありますか。(複数回答)

犬・猫	142
モルモット・ウサギなど	95
小鳥・ニワトリ	55
魚・爬虫類・昆虫など	263
飼育経験なし	53



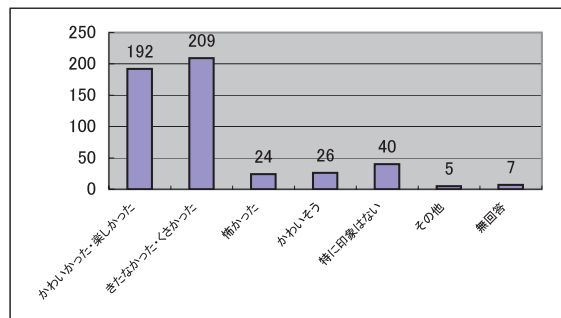
(項目3) あなたの小学校時代、学校の飼育動物に親しんでいましたか。

いつも傍にいった	42	13%
時々見に行った	234	70%
印象がない	38	11%
動物はいなかった	10	3%
近づきたくなかった	11	3%
無回答	1	0%
計	336	100%



(項目4) 小学校時代の飼育舎の印象は(複数回答)

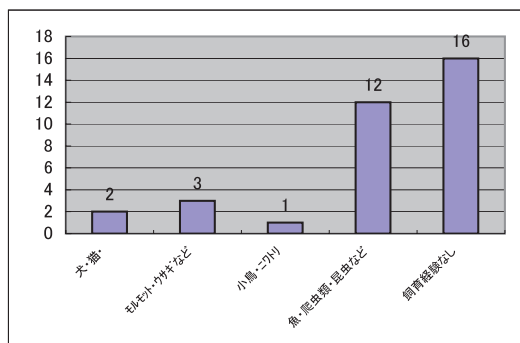
かわいかった・楽しかった	192
きたなかった・くさかった	209
怖かった	24
かわいそう	26
特に印象はない	40
その他	5
無回答	7



(項目1)のどちらかと言えば嫌い・嫌いの33人中

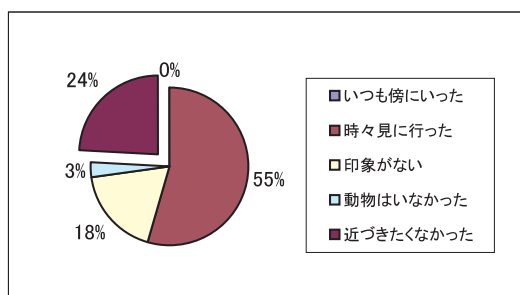
2) 動物を飼った経験がありますか

犬・猫・	2
モルモット・ウサギなど	3
小鳥・ニワトリ	1
魚・爬虫類・昆虫など	12
飼育経験なし	16



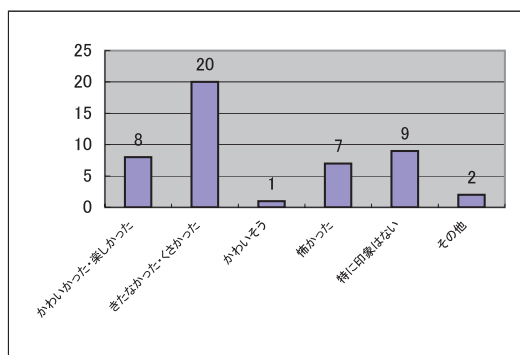
3) 学校の飼育動物に親しんでいましたか

いつも傍にいった	0
時々見に行った	18
印象がない	6
動物はいなかった	1
近づきたくなかった	8



4) 飼育舎の印象は(複数回答)

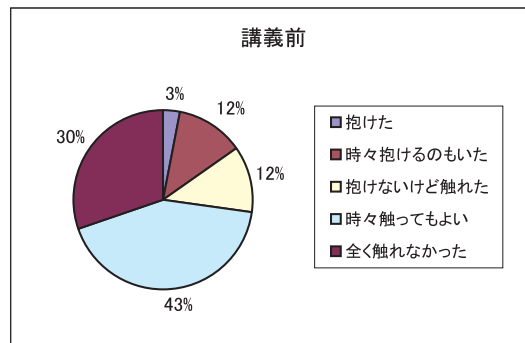
かわいかった・楽しかった	8
きたなかった・くさかった	20
かわいそう	1
怖かった	7
特に印象はない	9
その他	2



5) あなたは実習で動物に触りましたか？

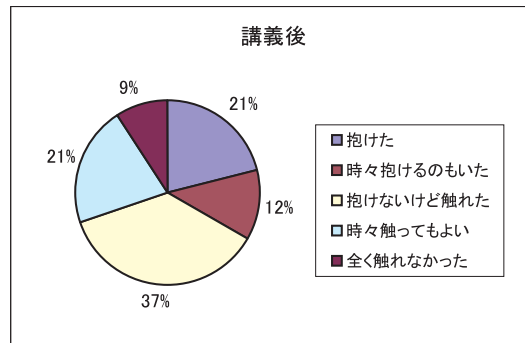
講義前

抱けた	1
時々抱けるのもいた	4
抱けないけど触れた	4
時々触ってもよい	14
全く触れなかった	10



講義後

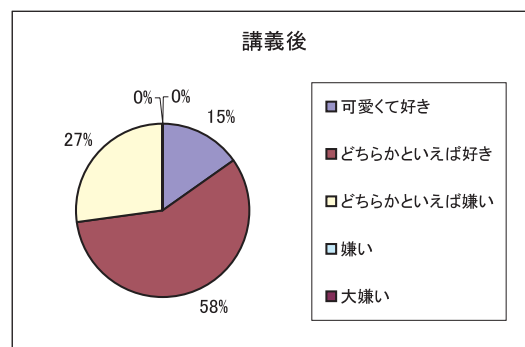
抱けた	7
時々抱けるのもいた	4
抱けないけど触れた	12
時々触ってもよい	7
全く触れなかった	3



6) あなたはこれらの動物をどう思いますか、実習の前とかわりましたか。

講義後

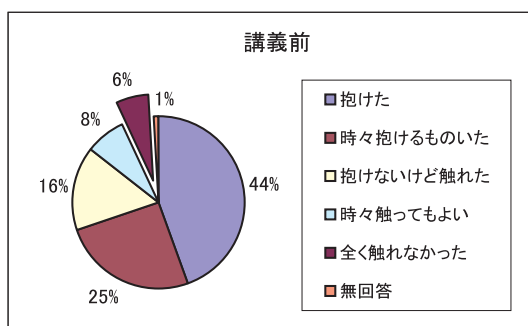
可愛くて好き	5
どちらかといえば好き	19
どちらかといえば嫌い	9
嫌い	0
大嫌い	0



(項目5) あなたは実習でウサギやチャボ、モルトットの動物に触りましたか？

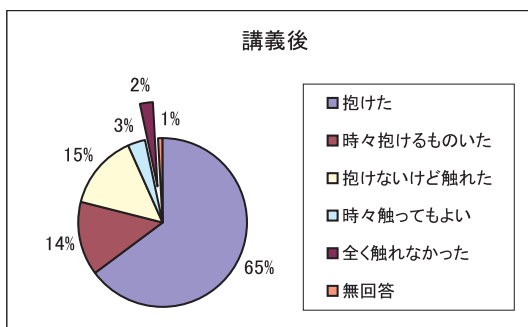
講義前

抱けた	149	44%
時々抱けるものいた	85	25%
抱けないけど触れた	53	16%
時々触ってもよい	26	8%
全く触れなかった	20	6%
無回答	3	1%
計	336	100%



講義後

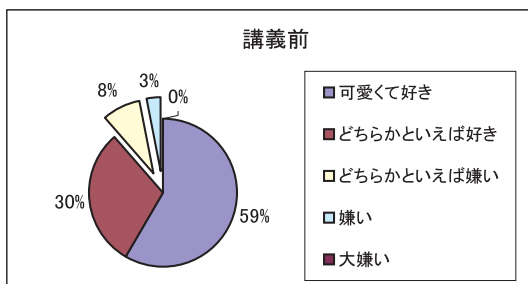
抱けた	217	65%
時々抱けるものいた	48	14%
抱けないけど触れた	49	15%
時々触ってもよい	11	3%
全く触れなかった	8	2%
無回答	3	1%
計	336	100%



(項目6) あなたはこれらの動物をどう思いましたか、実習の前とかわりましたか。

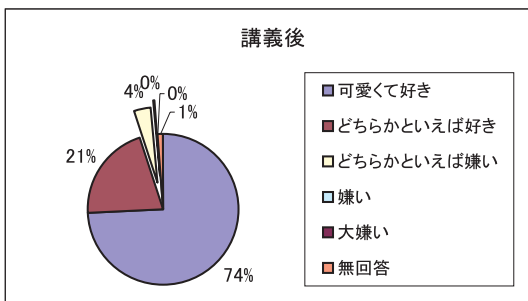
講義前

可愛くて好き	196	59%
どちらかといえば好き	102	30%
どちらかといえば嫌い	28	8%
嫌い	10	3%
大嫌い	0	0%
計	336	100%



講義後

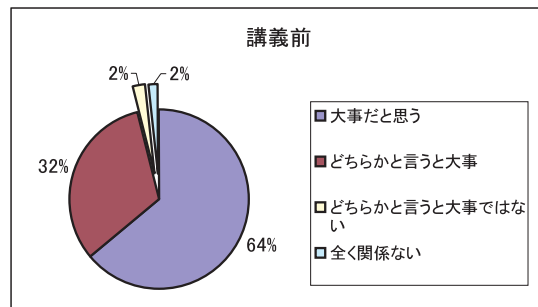
可愛くて好き	249	74%
どちらかといえば好き	70	21%
どちらかといえば嫌い	12	4%
嫌い	1	0%
大嫌い	0	0%
無回答	4	1%
計	336	100%



(項目7) 子どもの成長には動物飼育の経験が大事だと思いますか。

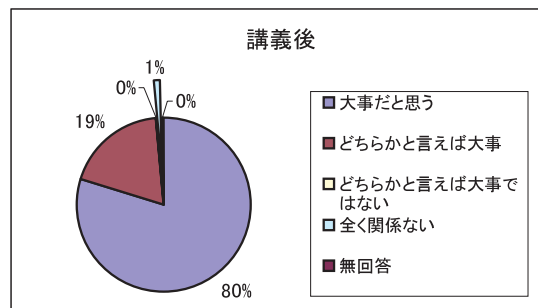
講義前

大事だと思う	215	64%
どちらかと言うと大事	108	32%
どちらかと言うと大事ではない	7	2%
全く関係ない	6	2%
計	336人	100%



講義後

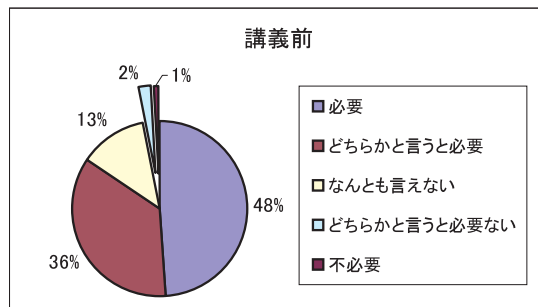
大事だと思う	268	80%
どちらかと言えば大事	63	19%
どちらかと言えば大事ではない	0	0%
全く関係ない	4	1%
無回答	1	0%
計	336人	100%



(項目8) 小学校では飼育動物が必要だと思いますか。

講義前

必要	164	48%
どちらかと言うと必要	120	36%
なんとも言えない	42	13%
どちらかと言うと必要ない	7	2%
不必要	3	1%
計	336人	100%



講義後

必要	227	67%
どちらかと言うと必要	81	24%
なんとも言えない	23	7%
どちらかと言うと必要ない	2	1%
不必要	3	1%
計	336人	100%

